

大会運営面・技術面への提案

岐阜県トライアスロン連合

渡辺昇

私が審判員になったのは、20年ぐらい前に参加した大会で、バイクの集団内で転倒があり、その巻き合いで怪我をしたことから、私みたいな思いを他の人にはさせたくない、少しでも安全な大会にしていきたい、と思ったからである。

トライアスロンは危険を伴うスポーツだが、ルールによって事故などの危険性を少なくすることができると思っていた。しかし、審判員をしているうちに最悪の事態では命を失うこともあることを知った。それは、スイムによって意識を失った人が、病院に運ばれ、帰らぬ人となり、非常にショックを受けた。この時、女性先輩審判員が、「一つの事故でうつむかないで！ まだ多くの命が競技しています。」と言った言葉が、今も忘れず心に残っている。

それまでは大会当日に行って競技中ルールを守るよう選手を見張っていれば大丈夫だと思っていたが、これは怪我を防げるだけで、誤りだったと気づいた。”選手の命の一部を私たちが預かっている“という意識を持ち、大会を安全に進行させるために、どう努めなければならないかを常に考えるようになった。

選手には初参加の人もいれば、数多くの大会に参加している熟練者までさまざま。また天候は暑いときもあれば寒いときもあり、年によってはコースまで変わる。当然その中で起こるトラブルも毎回違うので、そのときの状況に応じて安全管理に努めなければならない。しかし、審判員として経験を重ねれば重ねるほど、その難しさを痛感するのである。

近年、大会中に意識を失い、搬送される選手が多くなったような気がしないだろうか。岐阜・長良川トライアスロン大会は、日本中で一番熱い大会といわれているが、脱水症・熱中症などで倒れる選手がいる。無論、どの大会においても、トライアスロンは暑い時期のスポーツだから、こういったリスクは否めない。

搬送される選手の多くは、大学生で、それも初参加より2回目以降の人が多。これは初参加で完走でき、精神面的に、なれ・おごりなどが生じ自分の体力の限界がわからなくなってしまうからではないだろうか。

多くの選手は、体力の限界の前に何らかの形で体にサインが現れる。失速したり、筋肉の痙攣だったり人によってさまざまだが、このサインが現れることにより、スピードを抑えたり、休憩を取ったりして、自分の体をコントロールする。

しかし、なれ・おごりからこのサインを見逃してしまうと、脱水症・熱中症などになってしまい、倒れてしまう。

本来競技中の体調管理は自己責任。私たち審判員が、選手に体調面で事前してあげられることは何もない。もちろんルールにも選手の体調管理は審判が行うとは記載されておらず、競技中に危険な状態になる前に、注意してあげるか止めてあげることしかない。

5年くらい前、記念大会で大学選手権を併設して行われた大会があった。その日は、気温・湿度がともにとても高く、選手にとってかなり辛い条件のもと行われた。

レース終盤、各選手が続々とランに入ってくるが、中に足元がふらつき、呼吸が整っていない選手を見かけたので、健康チェックをしようとする、選手の先輩に当たると思われる方が数名、「とまるな！もっと早く！」と、かなりきつい言葉で選手を追い込んでいた。そのためか後に、ランコースの途中で倒れる選手が現れ、熱中症・脱水症・過呼吸の症状により4人同時にコース上で倒れてしまった。中には危険な状態に陥り、救急車で搬送し、なんとか一命を取り留めた者、またはコースから離れた草むらの中で倒れ、意識がもうろうとしているのに、前に進もうとあがいている者がいた。倒れた各選手は救護車両で搬送し、大会会場に待機していただいている Dr に見てもらい、大事に至らずすんだものの、他の審判員の応援が来なかったらと考えると、身がすくむ思いである。

そのときは後輩への指導も応援の一環のとして捉えていたが、選手が体力の限界になっていても、休むことを許さない先輩たちがいることを知り、今後このようなことが二度とおこらないように、この大会では、大会終了時に、各大学の部活（クラブ）の責任者に対し、トライアスロンはハードな競技故に、常に命の危険を伴うこと、闇雲に尻を叩くばかりが指導ではないと注意した。

又、ワンパクの大会では、親のほうに熱が入ってしまい、競技している子供が泣きながら走っていて、最後にはひきつけになりそうになったため、応援をやめてもらい、競技者（子供）に水を与え、落ち着かせてから、競技が出来るかを問い、競技者の意思で、続行したこともあった。

このような経験から、現在では前日の競技説明会や競技開始前に、審判からの注意として、過剰な応援・指導をしないこと、選手は熱中症対策・水分補給をしっかりと行い、競技終了後には、日陰又は風通しのよいところなどで休憩してから帰路に着くように伝えている、競技終了後心拍が安定せず、体調が整わなくなることがあり、危険だからである。

このように審判員は、選手だけでなく応援者にも気を配り、極度の応援・指導があった場合、状況に応じて注意するか、制止などをする。また選手の様子をしっかりと観察し、異常が見られる選手には、早めに休憩をとらせたり競技をやめてもらったりするように促すよう勤めなければならない。

ルールは、もともと選手が安全に競技できるようにするためのものでもある。しかしルールを守っていれば、選手の安全の確保が必ずできるといったものではないのである、上記のように選手には、さまざまな障害となるものがたくさんある。気象条件、当日の体調、精神的な圧迫などなど。そのため、TD.RR だけでなく、審判業務に当たるみんなで、選手だけ見るのではなく、周りの環境にも気を配り、気づいたことがあれば連絡を取り合って、事前の対応がとれるようにすると良いのである。

又、選手が大会に向けて練習するように、審判員も大会当日にだけ赴くのではなく、数日前から大会のシミュレーションが出来る方が良いのではないだろうか。近年は情報化により、インターネットにて大会の要綱ならびにコース図などが送れる為、会場周辺の環境や天候等を照らし合わせ、事前に予想される危険など、気がついたことを伝え合えないだろうか。審判は組織で業務に当たる。一人一人が安全に対して高い意識を持つこと、そんな意識を持った審判員が多く集まり、一丸となって行えばより安全な大会に近づくことができるのである。

大会によって環境・気象条件が違うので、当然その大会によるルールも、注意すべきことも違ってくる。大抵は大会前日、競技前にはこれらについての説明がなされるが、場合によっては、時間の関係で一部カットされてしまうことがある。事前に競技の危険性についてじゅうぶん把握し、自分の体調を鑑みて競技に臨んでもらうことは、大会を安全に運営するためには必要不可欠ではないだろうか。それを伝える時間がないならば、大会当日、審判員自らアナウンス等で伝たり、トランジットに準備で入ってくる時紙面を配ったり、スイムスタート前メガホンで伝えたりするなど、選手が安心して競技に参加できるよう、些細な事柄でもできうる限り選手に伝えるように努めなければならないのである。

最後に、長年続けている大会の大半が、最近の経済の影響から、経費節減のため、様々な所で予算を削られている。しかし、安全面での施設・準備は削ってほしくないものである。やはり審判員である我々が、大会のコース・環境をよく捉え、危険性についてよく検討し、大会主催側が、安全面に関係ないと思い、削ってしまうことも防いでいかななくてはならない。

大事なことは、選手の皆さんにルールを守らせるのではなく、自分の安全・安心のために守るのだという意識を持たせることではないだろうか。選手が帰るとき、すがすがしい笑顔で「ありがとう。」と言ってもらえること、そしてこちらも、楽しんで参加してくれた選手に、「こちらこそ、ありがとう」と言って返せる、そんな大会作りをしていきたいと願っている。